

2012年1月2日

博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 長谷川 晃
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目 抑うつ的反すうの能動性と関連する信念
Beliefs related to actively controlled aspects of depressive rumination
論文審査員 主査 早稲田大学教授 根建金男 博士（人間科学）（早稲田大学）
副査 早稲田大学教授 熊野宏昭 博士（医学）（東京大学）
副査 早稲田大学教授 嶋田洋徳 博士（人間科学）（早稲田大学）

多くの研究で、「抑うつ的反すう」という思考パターンが大学生の抑うつを強める要因であることが指摘されている。そのため、抑うつ的反すうの持続時間を短縮するための介入プログラムを開発することにより、大学生の精神的健康の向上に貢献できる可能性がある。このプログラムを開発するために、まずは抑うつ的反すうが持続するメカニズムを特定することが望まれる。本論文は、申請者が、先行研究における課題を踏まえて、特に個人の能動性という観点から抑うつ的反すうの持続過程を特定することをめざして行った研究をまとめたものである。

第1章では、抑うつ的反すうの概念、および、抑うつ的反すうが及ぼす悪影響について述べた。第2章では、抑うつ的反すうの持続過程に関する先行研究について、制御困難性と能動性という観点より整理し、概観した。第3章では、抑うつ的反すうの能動性に着目した研究における問題点について論じた。第4章では、本論文は抑うつ的反すうの持続過程に個人の能動性が関与するというモデルの検証と洗練をねらいとしたものであることを明示したうえで、1)抑うつ的反すうの測定に適した指標の特定、2)抑うつ的反すうに関するポジティブな信念と抑うつ的反すうの関連性の検討、3)抑うつ的反すうと関連性の強い信念の特定、4)抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデルの実験的な検討、という主な検討課題を示した。また、本論文の意義と全体的な構成について述べた。

第5章では、研究1で、抑うつ的反すうを測定する日本語版反応スタイル尺度の「否定的考え込み」をとりあげて、この尺度の得点が大学生の将来の抑うつ傾向を予測するという仮説を検討した。結果は、仮説を支持するものであった。この結果を受けて、以後の研究では

「否定的考え込み」の得点を研究の従属変数として用いることとした。

第6章は、抑うつ的反すうに関するポジティブな信念と抑うつ的反すうの関連性が本邦でも示されるかどうかを確認するとともに、抑うつ的反すうと関連性の強い信念の内容を特定することを目的とした。研究2では、4因子から構成された抑うつ的反すうに関するポジティブな信念尺度(the Positive Beliefs about Depressive Rumination Questionnaire: PBDRQ)を開発した。研究3では、PBDRQを用いて、抑うつ的反すうに関するポジティブな信念と抑うつ的反すうの関連性を検討した。その結果、1)本邦でも信念と抑うつ的反すうが関連すること、2)特にPBDRQの反すうしない不利益に関する信念が抑うつ的反すうと関連すること、3)海外で得られた知見とは異なり、反すうする利益に関する信念は抑うつ的反すうと関連しないこと、がわかった。上述の3)がどのような原因によって生じたのかを検討するために、研究4では、PBDRQと、海外で作成された、反すうする利益に関する信念を測定する尺度の翻訳版を用いた検討を行った。その結果、研究3と海外で行われた先行研究の結果の矛盾は、使用された尺度の差異によって生じていることが明らかになった。抑うつ的反すうに関するポジティブな信念は、どのような内容の信念であっても等しく抑うつ的反すうと関連する訳ではなく、抑うつ的反すうと特に関連性の強い信念が存在することが示唆された。

第7章では、第6章で行った研究の問題点を改善したうえで、抑うつ的反すうと関連性の強い信念を特定するために更に検討を行った。研究5では、抑うつ的反すう傾向の高い大学生を対象に半構造化面接を行い、これらの群が強固に保持する信念の内容を探索した。この結果を踏まえて、研究6では、反すうする利益に関する4因子(「自己や状況の洞察」、「将来の問題状況への準備」、「共感性の増加」、「不快感情の予防と緩和」)と、反すうしない不利益に関する3因子(「将来の失敗の回避」、「感情の持続と悪化の回避」、「性格や状況への悪影響の回避」)から構成された、反すうする理由尺度(the Reasons for Rumination Inventory: RRI)を開発した。研究7では、RRIを用いて、抑うつ的反すうと関連の強い信念の内容を特定するための検討を行った。その結果、反すうしない不利益に関する信念と、「自己や状況の洞察」に関わる信念が、抑うつ的反すうと特に関連性が強いことが示唆された。なお、ここまでの研究では、抑うつ的反すうを測定するために自己記入式尺度のみを用いてきたという限界がある。そのため、研究8では、抑うつ的反すうを測定する面接法を用いた場合でも研究7で得られた結果が再現されるかどうかを検討した。その結果、信念と抑うつ的反すうの関連性について、抑うつ的反すうを測定する自己記入式尺度を用いた場合には研究7と同様の結果が得られたが、面接法により抑うつ的反すうを測定した場合には同様の結果が得られなかった。そのため、今後の研究で、自己記入式尺度とは異なる方法で抑うつ的反すうを測定し、信念と抑うつ的反すうの関連性を検討する必要があることが示唆された。

第8章では、研究9において、抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデルの妥当性について

て、介入研究によって検討した。抑うつ的反すう傾向と抑うつ傾向の高い大学生を、介入プログラムを受ける実験群と特別な介入を受けない統制群に振り分けた。介入プログラムは、抑うつ的反すうに関するポジティブな信念や、抑うつ的反すうを導く目標を変容することに主眼を置いた手続きから構成された。実験の結果、実験群だけで抑うつ的反すう傾向が低下し、また、この変化は、RRI の「自己や状況の洞察」の得点の低下と連動していた。以上の知見は、抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデルの妥当性を支持するものであった。また、研究 8 までにおいて得られた知見も踏まえると、「自己や状況の洞察」に関わる信念が抑うつ的反すうと特に関連性が強いということが示唆された。

最終章である第 9 章では、全ての研究の成果についての総括的考察と今後の課題について述べた。本論文では、1) 本邦でも抑うつ的反すうに関するポジティブな信念が抑うつ的反すうと関連すること、2) 「自己や状況の洞察」に関わる信念が抑うつ的反すうと特に関連性が強いこと、がわかった。また、3) 抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデルの妥当性が強く支持された。今後の課題として、研究で扱った概念の測定方法や実験デザインの洗練を行ったうえで、本論文で得られた知見を再検討する必要があること、および、抑うつ的反すうを変容する意義について更に検討を行う余地があること、に言及した。

本論文において高く評価できる主な点は、以下の通りである。

(1) 従来の研究において、抑うつ的反すうに関するポジティブな信念が抑うつ的反すうと関連することが確認されていたが、どのような内容の信念が抑うつ的反すうと特に関連性が強いのか特定されていなかった。しかし、そうした信念を特定することは、抑うつ的反すうの持続過程を理解するうえで非常に有用な情報となる。よって、本論文の中で、5 つの研究を通して、抑うつ的反すうと関連性の強い信念を特定し、抑うつ的反すうの持続過程に関するメカニズムの存在を浮き彫りにしたことは、高く評価できる。

(2) 抑うつ的反すうの持続に個人の能動性が関与するというモデルの妥当性について、従来の研究では、横断的な手法を用いて、抑うつ的反すうに関するポジティブな信念と抑うつ的反すうの関連性を確認することによって検証を行ってきた。従来の研究におけるこの限界を克服するために行った研究 9 では、介入研究を用いた検証を行うことにより、抑うつ的反すうに個人の能動性が関与する可能性を強く示唆する知見が得られた。このことは、抑うつ的反すうの持続過程の理解に基づいて、抑うつ的反すうの持続を断ち切る介入技法を考案する際に、大いに役立つものと期待される。

(3) 研究 9 では、抑うつ的反すう傾向が低減される過程を検討した。従来の研究では、抑うつ的反すうの能動性に着目した介入プログラムの効果の検証がなされていない。そうした状況において、この研究で、抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデルを、抑うつ的反すうの持続を断ち切る手続きにどのように生かすことができるのかを明示し、かつ、その効果

を実証したことは、高く評価できる。

なお、本論文（一部を含む）が掲載された主な学術論文は、以下の通りである。

長谷川晃・金築優・根建金男 2009 抑うつ的反すうに関するポジティブな信念の確信度と抑うつ的反すう傾向との関連性 パーソナリティ研究, 18, 21-34.

長谷川晃・井合真海子・根建金男 2010 抑うつ的反すう傾向の高い大学生が保持する抑うつ的反すうに関する信念の内容 早稲田大学臨床心理学研究, 9, 49-59.

長谷川晃・金築優・根建金男 2010 抑うつ的反すうを促す反すうする利益に関する信念の内容 パーソナリティ研究, 18, 248-251.

長谷川晃・根建金男 2011 抑うつ的反すうとネガティブな反すうが抑うつに及ぼす影響の比較 パーソナリティ研究, 19, 270-273.

長谷川晃・根建金男 2011 抑うつ的反すうと関連する信念の内容 感情心理学研究, 18, 151-162.

本論文においては、研究の方法論を改善する余地があることなどの課題も残された。しかし総じて、本論文は、所期の成果をほぼ達成し、優れたものになったといえる。よって、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上